

# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十七)

津 守 真

## 命令すること

五月二十三日

私が砂場にゆくと、すぐに、Nががまがえるを手にのせて見せにくる。数人の男児が山や川をつくり水を流している。

五歳児の一学期には、二年目、三年目の子どもたちは、以前に比べると、自分で遊べるようになってきていることが多いことはたしかである。しかし、遊ぶときにおとなの手を要求する子どもも絶えることがない。Kは五歳の一学期にはそのような状態にあつた。

私を見つけてKがくる。「穴を掘れ」と命令口調で言う。私は穴を掘る。一寸手を休めると、「早く掘れ」「もっと掘れ」と言う。自分は何もしないで、砂場の縁に立っている。私は砂場の穴掘りは、他の子どもについて、何度も手伝ったことがある。穴に対す

る子どもの関心がいろいろと察せられて、面白いことがあるのが普通である。ところがこの場合は、私は穴を掘らされているのであって、穴を掘る興味を子どもと分ち合う楽しさがない。私は「穴の中に何があるんだ？」とたずねると、「貝がある」と言い、「早く土の出るところまで掘れ」と言う。私はようやくやくかなり深くまで掘る。Kは落し穴だからと新聞紙を持ってくる。ここで初めて、私もKの考えていた落し穴であったことが分る。新聞紙を穴の上にひろげるが、穴が大きすぎて、じきに紙が落ちそうになる。「だから大きすぎると言ったじゃないか」とKは言う。私も、ここを押さえている。ここに砂をのせろなど言いながら、いろいろと工夫したが、新聞紙は砂とともに穴の中に落ちてしまった。結局、Kは足で穴を埋めてしまい、足が埋まったことから、足うめになる。他の子どもも来て、足をうめてくれと言う。Kは「もっと砂をかけろ」「後もうめろ」など、次々と命令する。

この日は、私は、言いかえしたり、しゃべったりしながら、Kの命令の遂行者となった。保育のあと、担任のH先生は、Kと私のやりとりを見てのことかどうか分らないが、「今年の五歳児は、

特に、自分で考えてやることができなくて、人に要求することが多い」と言う。三歳児からの子どもはそれほどでないが、四歳からの子どもにそれがはげしいという。

子どもからでも、命令されるということは愉快なことではない。おとなが子どもに命令するのは当然のこととみなされるが、子どもがおとなに命令するのは逆の関係だから、おとなの権威感を傷つけることにもなる。しかし、おとなはそこで感情的に反応するのであってはならないと思う。もしもそうしたら、おとなとの相互の柔軟な関係を断ち切ることとなり、子どもは一層かたくなになり、また、反抗的となるだろう。この子どもの家庭背景など私は全く知らないのであるが、この子どもと接して私はいかにたくなさや人間関係の柔軟性の欠如などを感じさせられた。また、この子どもの中に自然に湧き起る遊びの原動力とも云うべき創造的な心の流露が、どこかで阻まれたのではないかと思わされた。これは推察の域を脱しないのであるが、この子どもの命令的行動の背後には、多くのことがかくされているのではないかと思われた。

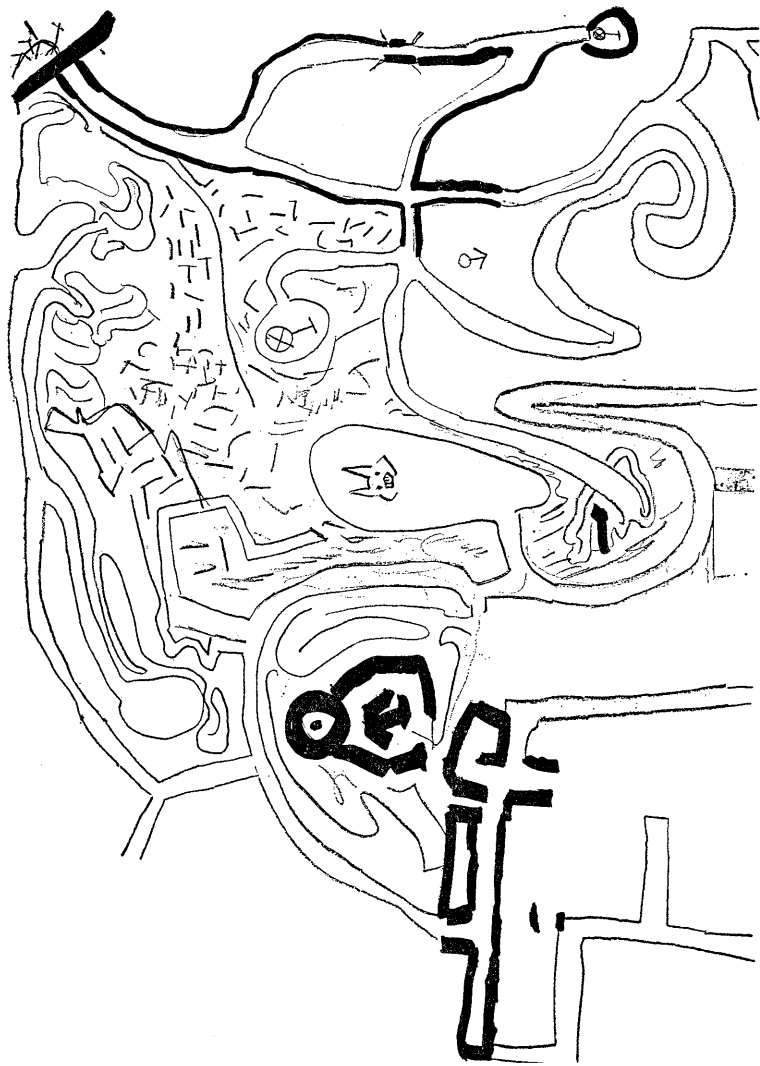
それから一月程たった七月四日に、同じ砂場で、私はKが他の子どもたち数人と、水道から樋を渡して水を砂山のトンネルの中に流して遊んでいるところに出会った。このときは、私が傍にいても、Kは全く私に頼着せず、他の子どもたちとやりとりしながら遊んでいる、その柔軟な相互性(mutuality)に私は驚いた。

担任のH先生に、私のその感想を話すと、「やっとこのごろ、自分で遊べるようになったんです。今学期のはじめころ、Kをつき放すようにしたら、かえって依存的になって。このごろ手をかけるようにしたら、自分で遊べるようになったんです。」とのことであった。手をかけるようにしたら、命令的行動が消えて、自分で遊べるようになったというのであるから、命令行動によっておとなとの接触を求めていたと考えてよいだろう。おとなは子どもに命令に従うのではなく、柔軟な応待をしながら、密な接触を保つのが、手をかけるということであろう。そのことが、子ども自身的生活を、また、他人との相互関係（相互関係）を育てることになるのである。

Kの命令的行動に関して、更に後になって気が付かされたことがあった。

三学期になって間もないころ、(一月十六日) Kは床に腰をおろして、ビニールのたこを作っている。定規をあてて、鉛筆で真直に線を引き、そのまわりをはさみできちんと切る。時間をかけて、ひとりで丹念にやっている。私はその傍で他の子どもと遊んでいたが、ひとりで黙々と作っている姿に感心して見ていた。午後から私はたこの糸目をつけるを手伝ったが、糸の長さを等分にきちんと切らないと承知しない。当然のことながら、それではたこはうまく上らない。それでもKは、糸の長さを正確に等分することに固執する。

その翌々日(一月十八日)、Kは一人でのこぎりで木を切っている。鉛筆で直線が引いてあり、その線の通りに切ろうとしている。一人で頑張っている。こういう場面を見ると、K一人の世界の中にも、自分に命令する基準(直線を引いて、その上を正確に切らねばならないというような)があるように思われる。その命令基準は、この場合には直線によって象徴されている。五月の砂場で私にあんなに次々と命令したのは、穴の形や大きさがKの頭の中にはすでにでき上っていたのであろう。たこ作りや木片切り



では、自分一人の世界で自分が命令に従うことを努力しているのである。こういう命令基準が作られるに至ったのは、この子ども自身の過去の何らかの体験の集積があるのであろう。それが何であるのかは、いまのところわからない。けれども、このことが場合によっては自分をも不幸にし、他人をも苦しめることになるのであると思う。おそらく、このことは、この子ども自身はまだ当分ひきずって歩かなくてはならない課題であらう。

それからしばらくして、二月六日に、Kは私のところに来て、「迷路つくろう」と言う。白い画用紙をもってきて、私にかいてくれというので、私が鉛筆で路をかくと、Kはその上をマジックでいいねいになぞる。(前頁の図1参照) Kはここが出発点だと言って、マジックで直線を引いて出発する所をきめる。私が迷路の路をかくてゆくと、行き止りがなくてはいけないと言って、Kは袋小路を作つてゆく。そのうちに、マジックで目標の終点地をかくが、そこに至る路を作るのではなく、路をあちこちにのばし、その路を辿つてゆくと、草沼のような「生き地獄」(Kがこのように言う。)に入りこんでしまう。結局、目標に至る路は作られず、いくつもの袋小路と、いくつもの生き地獄に至る路が画かれたのがこの迷路であった。おとなのかいた線の上をマジックでなぞるといふ、自らに課した命令を遂行することからはじめ、その

ゆきつくところが袋小路と生き地獄であることは、一見強そうに見えるながら、K自身が負っている精神的課題の重さを示しているように思われる。それでも、この日には、線の上をなぞるだけではなく、それとは独立に目標地点が作り出されたことは、未来への可能性の片鱗がうかがわれるように思う。

迷路つくりのあと、Kは山の上で赤土でだんごづくりをする。Kは赤土をこねて、「うんこみたい」と言う。私もその赤土を掌の中で圧縮すると、そのような感触がある。こういう混沌の作業の安らぎが、精悍で緊張質なKには必要なのだと思う。

五月の砂場でKの命令的な行動に立ち返つて考えてみると、この命令的行動は、第一にはおとなとの接触を求めていたことのあるらわれであり、そこには、自分の頭の中に作られた基準に合わせようとする努力のあらわれであったと考えられる。Kが自分らしく遊ぶことができるようになるには、K自身の負っているこうした課題をのりこえねばならない。すなわち、Kの命令的行動を

も拒絶することなく、身に引き受けて、柔軟に応待するおとなを、つまり、おとなが手をかけることを必要としている。また、K自身が自分の目標をもって、それを表現する体験を必要としている。それには、おとなから与えられた目標ではなく、泥こねのように、自分自身の中から自然に次の目標が生れ出るような素材にもっとふれることがよいのではないだろうか。それによって、自分自身の中の各部分ももっと調和のとれたものとなるであろう。また、対人関係においても、もっと柔軟な、対等な態度が作られてゆくであろう。

さらに継続してこの子どもと接する機会があれば、彼の命令的行動<sup>注</sup>についても、新たな角度からの理解ができるだろう。ここに述べたことは、その一部にすぎない。新たな保育的接触が加われれば、それだけ子どもの理解も増してゆくのである。(つづく)

注 命令は、英語では、order と command と二つの語が対応する。order は秩序とも訳されるが、ラテン原語では、真直な列、

直線、規則的系列等の意味がある。知覚面での直線や秩序を求めていることが命令行動と関連あることを示すものではないだろうか。見たところが秩序を保っていないと、秩序を整えようとして、命令することになる。知覚面での秩序に対する寛容度には個人差が大きいことは、心理学の研究で知られている。その個人差がどうしてできるのかは明らかではないが、このことは命令行動の個人差とかなり関係があるだろう。

command は、命令し、支配することであるが、ラテン原語では、集めて手の中に収めるという意味である。それだから、眺望して全体を見渡すというときに、この語を用いる。全体の眺望ができたときに、位置づけや整頓が行なわれることになり、そこから命令行動が生ずることになるであろう。日本語の「おほせ(仰せ)」は、人に背負わせることであり、自分の荷物を人に負わせる意であるという。

これらの問題については、おとなの社会においても、考えるべきことが多くあり、ここで尽くすことはできない。今後の課題として残したい。